
Arms of life

BBB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A r m s o f l i f e

【Nコード】

N 6 0 7 7 H

【作者名】

B B B

【あらすじ】

人かと問われれば、人ではないと応える。どこが人ではないのかと問われれば、全てが人ではないと応える。彼女は人ではない、『武器』であった。

ただいま更新停止中。

一話 怪物くモンスター＞（前書き）

「R-15」と「残酷な描写有り」が入っていますが、そういった描写はまだ先になります。

一話 怪物くモンスターく

『目標目視確認、現在位置——』

一人の斥候が声を上げる、それは空気振動の音声伝達ではない。思念波による意思伝達魔術くスペル・ウィスパーク、それは速やかに遙か後方の軍司令部へと伝えられた。

その斥候が瞳に写すのは少女、木々の間をすり抜ける黒髪の少女。

『A—45、D—56。 繰り返す、A—45、D—5——』

そうして最後まで繰り返されず、尋常ではない速度で迫り寄った少女に蹴りを入れられ、斥候兵の意識が刈り取られた。

深い密林、そこに生息する獣でも成しえない速度で駆ける人型。膝裏まである長い黒髪を激しく揺らしながら右腕を力強く振った。振りぬいたそれは、黒光りする長い刃、薄く研ぎ澄まされた刃。似ている形状の物で例えると『東洋の刀くブレードく』、その刀の握り手、柄も刀の切っ先にしたような双刃。

無論そんな全て刀身である武器など誰にも使えない、振り回す所か握る事さえ出来ない。

だがそれを使う少女には関係ない、なぜならその刃が『彼女の一部』であつたからだ。

手の先は刃で、肘から突き出すのも刃で。

右腕自体が『武器』、鋭利な刃物であった。
人ではない、右腕が武器など人間ではない。

「ハアツツ！」

ボンッと地面が凹む位に踏み込み、30メートルほど飛び上がる。
弾丸のように跳ね上がった体は樹木の枝と葉で出来た天井を切り
裂き、蒼天の空を瞳に写した。

そうして眼下に収める森、その森を抜けた先には平原。
ずらりと並ぶのは武装した兵士、距離は約1500メートルと言
った所。

「多いわね……」

万有引力、全てのものは大地に引かれ、重力に引っ張られる。

人ではない少女も同様に引っ張られ、落下し始めた。

無論、ただの人間が30メートル落下して地面に叩きつけられ
ば、最善で瀕死、その他即死な高さ。

やはり無論、人ではない少女は地面を陥没させるだけで傷一つ、
骨にひび一つ入れないで着地した。

反動でバウンドしたかのように飛び上がり着地と同時にまた駆け
る、標的を狙って平原へと向かって走った。

「……来るな」

「目的は明らかに此方ですので」

平原の中心に置かれた天幕、その中に届けられたスペル・ウィスパ―を聞いていた二つの人影。

ずっしりと重厚な鎧を着た壮齡の大男と、逆に身軽そうな薄い鎧を着た妙齡の女性がいた。

「勝てますか？」

「勝つしかあるまい、それしか命じられておらんのでな」

「まあ負けますね、多分あの右腕でぶった切られるんじゃないでしょうか」

「人の形をした化け物か、これならジャイアント＜巨人＞を相手にした方が楽だろう」

「えー？　なんでA A＜ダブルエー＞モンスターと比べるんですか？」

「しょうがねえだろ？　そんな能力があるって資料にあったんだからよ」

心底嫌そうに、大きくため息を吐きながら女は口を開いた。

「何ですかA Aとか、そんなの相手にしたくないですよ。隊長でもAなんでしょ？　なら隊長クラスがあと10人は必要じゃないですか」

「だからお前が付いてるんだろ、俺だけじゃ間違いなくぶっ殺されるからって」

「私が付いてるからって確実にやれるわけじゃないですよおー、せめてもう一人A A級……」

副隊長らしき女性が言い切る前に、天蓋の入り口から慌ただしく兵士が駆け込んできた。

「隊長！ 出ました！」

「分かってるよ、手を出すなってしつかり命令しといたか？」

走りこんできた兵に視線を向けながら、めんどくさそうに言う。

「あんなの馬鹿しか手を出しませんよ」

「そりゃそうだ」

苦笑しながら立てかけていた斧槍を手取る。

「本気でやるんですか？ 逃げられたって言えば上も文句言いませんよ」

「そうですね、隊長に死なれたら俺たちどうやって飯食っていくんですか」

「文句なら絶対出るだろ、俺たちにそこまで期待しちゃ居ないだろうが。 飯の心配は自分で考えろよ、お前等の人生だろうが」

斧槍を肩に担ぎ、づかづか、ドスドス、ガチャガチャ、音を鳴らして天蓋を後にする。

「……いつもどおり馬鹿な人」

「あーあ、死んで欲しくねえよ」

呆れながらも二人は男の後を追った。

天蓋から出て、歩く。

平原に設けられた陣営、並ぶ将兵に手を上げ挨拶。

「目標は北西の密林を南下中、抜けるまで後数分だと思われます」

駆け寄ってきた士官、本来なら副隊長であるあいつが受け持つ仕事なのだが。

『めんどくさい』

その一言でこの士官が副隊長の仕事を一手に引き受けていた。

「また放り出しやがって、すまねえな」

「いえ、それより隊の配置は……」

「待機だ、一切手を出すなよ。撤退の準備もしとけ、それと斥候もしっかり回収しとけよ」

「了解」

敬礼、そうして命令を他の隊に伝えるため走り出していく。

それを見送りまた歩き出す、天蓋の近くには小高い丘。

平原を一望できる位置まで上っていく。

「向こうか？」

「じゃないですかね」

「向こうですよ、もうそろそろ出てくるかと」

いつの間にか後ろにいた二人、いつもの事なので突っ込まない。

「もう一度聞きますけど、本気でやるんですか？」

「くどいぞ、やるってんだからやる」

「ねえ隊長、止めましょうよ。本気で死にますって」

「お前等さっさと撤退準備に行け！」

「『俺に構わず引け！』とか格好よく言っても無駄ですよ。と言うか隊長がそんな事言っても格好良くないし」

「似合いませんよ、寧ろ『全軍突撃！』とか言ってる方が似合いますって」

「お前等な……」

気が滅入る、何でこいつ等がうちに配属されたんだか……。

「一騎打ちでもして、俺がやられればそれで撤退できるだろうが」

「報告じゃ殺さないって上がってますけど、絶対殺しまくってますって！」

「やばいって！ 本当にやばいって！ 私の第八感が『無理無理！』

死ぬって！』と囁いてます！」

「何だ第八感って、んなもんあるか！」

そんな漫才してると、森側から歩いてくる一つの影。

「っ、出て来ましたよ！ ほら、逃げましょうよ！」

「お前等だけで逃げろっての」

こいつらうるせえ、と疲弊して丘から歩みだす。

「はぁ……もう。何でこうも頑固なんですかね？ 鍋のそこに付いた黒ずみ見たいに頑固ですよ、この親父」

「お前黙れ、いい加減気が散る」

「黙りませんよ、隊長がやるってんなら私もやらなきゃいけないし」

「俺は足手まといなんで見てるだけですが、隊長。本当に死なないでくださいよ」

「相手次第だろうが」

渡された兜を被ろうとすれば。

「鉄も真つ二つなあれ相手に兜を被るなんざ、自殺行為ですよ」

そう言われ、奪われた兜を奪い返し被る。

「これで良いんだよ、余計な事して調子狂っちゃ堪らん」

「視界潰してまで守れませんよ」

「守る、じゃねえ。これが『一番』なんだよ」

フルプレート、重厚な戦士。

『重戦者、オグマ・グラフト』が戦に立つ。

「お前等絶対に手え出すなよ！」

「お気を付けて！」

怒号に近い、それを聞いたオグマの部下たちが一斉に敬礼をする。

「ま、やれるだけやって撤退ですよ。それが最大の譲歩ですから」

白銀色に光を放つ刺突剣<エストック>、それを腰の鞘から抜き取ってだらしなく手に持った。

「AAって信用できるんですかね？ Aランクを10人以上ノしたってなら、まあそれ位だろうと思います」

「今まで得られた情報から、総合的なランクはAAらしい。もしかしたらA程度かもしれんし、AAAかもしれない」

「げえ、もっと早く聞いておくんだった」

「ま、格上か格下か。結構強いのは間違いないらしいがな」
「はぁ、気合入れてやりますか」

手元でエストックを回す『魔術賢士、エリア・ハールトー』が魔力を練り始める。

「お前は後衛だ、良いな」

「私が前衛とか言い出したら正気を疑いますよ」

二人して笑う。

「やるか」

「やりますかね」

見る先は、女。

大人と少女の狭間の年齢、少女と言うには遅過ぎて、大人と言うには早過ぎる。

蒼を基調としたブレザー、右袖は裂け、右腕である部分は異形の黒い刃が生えるようにくっ付いている。

紺を基調としたスカート、所々切れ目が入り、スリットのように太ももが見え隠れしている。

顔は老若男女が振り返る整った顔、髪色は黒く長い。

「……予想以上じゃないですか、これ？」

「だから何だよ、やるしかねえのさ」

人の美しさの上限を超えて存在する存在。

見惚れるとかじゃない、見るだけで鳥肌が立つような存在感を放っている。

周囲を囲む兵も、視線が釘付けになるか、直視できないか。

とてもまともな物を見る目ではない。

「貴方たちが隊長、指揮官？」

「……ああ、おめえさんをつまえに來たのさ」

「そう、お願いがあるんだけど……」

やはり人なのか、人語を解して喋っている。

しかしながら、その右腕は人のものではない。

「引いてくれってんなら無理だ」

「そうじゃなくて、戦うなら一騎打ちでもしませんか？」

「……なに？」

唐突過ぎる提案に、一瞬だけ呆ける二人。

「それで、負けた方が勝った方の言う事を聞くってのはどうでしょう？」

「……なんだ、おかしいな提案だな」

「こっち向けじゃないですか。 私たちが勝ったら私たちについて来る、貴女が勝ったら私たちは逃げ帰るって事でどうでしょう？」

「……受けてくれるとは思いませんでした」

「まさか、以前もこんな提案したんじゃないだろうな？」

「しましたよ、そうしたら一気に襲い掛かりましたけど」

……頭沸いているのか？

「そんな余計な被害出す意味無いじゃないと思いませんか？ 死んだ人にしたって誰かが片付けないと、疫病の苗床とかになりますし……」

「そりゃあ……、たしかにな」

「上はそこら辺全然考えてないですよねえ、戦いが終わったらそのまま、さっさと帰って戦場の放置とか考えられませんか」

「下の事考えてないんだろうよ、戦だけを楽しむ阿呆どもばかりだ」
「……自分勝手に、他人を省みない人たちばかりなんですよね」

うんうん、と頷く3人。

「って、何でこんな話してるのかな？」

その言葉に、驚いたように三人が顔をあわせる。

「っ、フフ。残念」

「……まあ、残念だ。一騎打ちってのは無理だが、俺とこいつが相手をさせてもらおう」

「良い友達になれそうなんだけどねー」

武器を構える。

俺たちの任務は『化け物を捕らえるか殺す事』、つまり目の前の嬢ちゃんと戦う事。

そう認識しなおして、爆ぜた。

「オオオッ！」

自身に臂力増強魔術＜スperl・パワー＞を掛け、大地を駆ける。
さらにエリアから強度増強魔術＜スperl・ディフェンス＞が掛けられ、攻守共に強化された肉体が奔る。

「チィイヤッ！！」

粉碎衝波＜スキル・ブレイクパワー＞を発動、オグマが持つ斧槍

が大地を裂く。

それを鮮やかに避けきり、踏み込んでくる少女はオグマを顔目掛けて左手を伸ばす。

「無理、させないよ」

電光がオグマを迂回して、誘導雷撃魔術＜スperl・リードライトニング＞が少女の左腕に落ちた。

閃光を生み、対魔力の低い箇所なら炭になる一撃。

さらに麻痺効果も誘引する攻撃、生物なら殆どに効果的である。

だがそれもこの少女には効果的ではない、落ちた場所に小さな火傷を付けるだけ。

「ッ」

電撃で少女は痛みを感じ、動きが鈍る。

隙と見てショルダータックル、そのまま石突と穂先の斧で少女を撃つ二重倒打＜スキル・ダブルパウンド＞を放つ。

「ジャッ！」

尖った石突が少女の腹を打ち、返しの斧が頭部目掛けて振り下ろされる。

当たれば頭を割る、それが確約された一撃。

渾身、会心の一撃。

脳漿をぶちまけて目の前の少女は倒れる、それを確信して。

「グッウッ！」

穂先の斧が当たる前に、少女の左掌がオグマの鎧を打った。

自動車に跳ね飛ばされたように、重鎧を着た大の男を大きく打ち飛ばす。

「スperl！」

跳ね飛ばされるオグマとすれ違いに、高速で駆けるエリアが接近戦に持ち込んでくる。

攻める、既に前衛後衛など括る必要が無くなっている。

「疾風を纏い重ねよくウィンドランダー>！」

その身に風を纏い、攻撃速度を上げる風の身体強化魔術。

速さは疾風、通常でも非常に速い刺突が、魔術の底上げにより閃光のように放たれる突き。

胴を中心として連撃、とめどなく打ち出される刺突。

「これまで戦った人たちより、断然速いわ」

「ッ、スperl！」

どの一撃も人の胴を貫通する威力を持ったそれ、撃ち抜かれて穴だらけになっていて当然の攻撃が『どれも効いていない』。

動いた少女の左手が全てを止め防ぐ、そのまま伸びてくる腕に危険を感じて風圧捕縛魔術<スperl・バインドエア>、動きを封じるために風の縄が少女の体に巻き付く。

その戒めを、剛力により難なく打ち破った腕がエリアの首目掛けで迫る。

「やらせん！」

飛び退くエリア、入れ替わるように踏み込むオグマ。

「ヌオオ！」

大振りながらも速度を持った一撃。

人を横に両断する、食らった者は上半身と下半身が回転しながら離れ離れになるであろう一撃。

「これまで戦った人たちより、断然力強いわ」

そうして、少女の右腕は『変形した』。

刀を思わせるフォルムの右腕が、分厚く、黒く、重いであろう『西洋の大剣<ソード>』へと刹那に変化した。

「正しくッ！」

化け物、1.5メートルは有ろうかと言う長い刀身を作り出し、少女はオグマの一撃を受け切る。

スペル・パワーにて臂力の底上げされたオグマが、一回り以上小さい少女を押し切れない。

寧ろ押し返され始める始末、その状況に齒軋り。

Aランクの自分とAAランクのエリアを平然と押し返すその姿、どこがAAランクか。

AAA<トリプルエー>、そのランクで通用するほどの実力。

「スペル！」

エリアがエストックを振るい、切っ先を少女に向ける。

それと同時に暴風、切っ先から大地を抉る竜巻が蛇のように這い出る。

「風よ、噛み抉り取れくエアサーペンバイト>！」

圧縮された風の牙と顎、大岩さえ噛み砕く風蛇が少女に向けて吐き出される。

横向きの竜巻、その表現が一番しつくり来る。

オグマの右側面から地面を抉り進む風蛇と、それを撃ち放ったエリアがオグマの左側面から攻撃を仕掛ける。

『人足らず、武器足らずには、人でなし』

少女が右腕を振るう、大剣がオグマごと斧槍を弾く。

少女が左腕を振るう、2メートルを超える黒色に広がった楕円形。それは盾、叩き潰す『武器』。

右から迫るエリア、それより早く風蛇が大顎を開けて突っ込んでくる。

それを正面から迎撃、天高く掲げた左腕を、盾を蛇に向かい斜め上から振り下ろした。

「うっそお……」

正面から魔術を打ち据えた。

頭を潰された風蛇が解け、解れた風は暴風を生み、砂煙を舞い上げる。

広がる砂煙は驚愕して足を止めたエリアと、5メートルは吹っ飛び、3メートルほど転がり何とか起き上がっているオグマさえ包み込む。

「終わり」

「なっ、ッ！」

エリアが飛んできた何かをエストックで弾いた時には、別の方向から伸びてきたモノに手足が絡め捕られる。

「なん、キャッ!？」

「エリア!」

立ち上がり体勢を立て直したオグマは、悲鳴を上げたエリアが居た方角へ走り出す。

ガチャガチャ、ドスドス、構えたまま砂煙を掻き分け、見たものは縛り上げられたエリアだった。

「余り抵抗しないでくれると助かりますが」

黒く細い何かが、少女の右腕や肩から何本も生え出ている。

それに絡め捕られたエリア、恥ずかしそうに俯いていた。

「凄い失態ですよこれ、と言うか色々恥ずかしいんですけど!」

黒く細い何かは、エリアの鎧の下まで張っている。

「すみません、直接触れてた方が力加減間違えにくいんですよ」

「……えっと、力加減間違えたら」

「こうなります」

一本の黒く細い何かが地面に落ちていた拳大の石に巻きつき持ち上げ、バンツと砕いた。

「参った! 負けた! 降参! 死にたくない!」

それを見た途端にエリアが喚き出す。

「離せって言っても離さねえんだろ？」

「いやー！ 助けてー！」

「そうですね、負けを認めて下がってくれるなら離します」

「お父さんお母さん！ まだそちに逝きたくないです！」

「……わかった、わかったからエリア、お前ちよっと黙れ」

耳を劈く声に斧槍を下ろし、構えを解く。

「物分りが良い方で助かります」

「一応それでも部下だしな……」

「ほら！ 隊長が武器下ろしましたよ！」

「いえ、まだ部隊が下がっていないので」

「いやあー！ そんなこと触らないでえー！」

「……はあ」

スperl・ウイスポーで撤退開始を命令する。

「……直ぐに下がる」

「分かりました」

絡め捕られ持ち上げられているエリア、それを持ったまま歩き出す少女。

「え？ ちょ、なんで歩くんですか！？ お持ち帰り！？」

「移動の時間を少しでも短縮しようと思ったただけですが」

出てきた森とは反対方向へ進み少女。

歩いて歩いて、小高い丘へと上る。

既に撤退する準備をしていたのか、大人数が隊列を整え東の方向

へと移動していく。

「……約束通り」

一瞬で引っ込む黒く細い何か、持ち上げられていたエリアが足を着ける。

「感無量、生きているってすばらしいですよ」

「……そうですね、それでは失礼します」

「ちよっと待て」

「……なんでしょうか」

「その……お前さんが『普通じゃない』ってのは分かったが、お前さんは一体何なんだ？」

「それを知ると、死にますよ」

視線を細め、少女がそう言った。

「お前さんが殺すってのか？」

「いえ……、それすらも知らない方が良いです」

そう言って一礼、弾かれたように少女は飛び上がり、遠くに着地後、高速で駆け走り去っていく。

「……あの娘を捕まえろって？　A A Aが何人も要るって、無理無理」

「なあーんか、嫌な予感がするな」

「死の予感なら今さっきまで感じてましたけどねー」

オグマが大きなため息、戦士の予感とでも言うのか。
危険が纏わりついて来そうな悪寒が背中に奔っていた。

平原を抜け森を駆ける、凹凸の激しい森であるにも係わらず異常に速い。

それに付いて走る存在が一つ。

「……あの子達を守ってあげて」

『……守ろう、だからお前も死ぬな』

「うん」

返ってくる返事、これ以上の会話は必要なかった。

付いて走る存在は離れ、知覚外へと抜けていく。

また一人になる、そう思って失わぬよう思いを込める黒髪の少女だった。

一話 怪物くモンスターく (後書き)

多分更新はかなり遅いです。

二話 冒険者雇用機関＜ギルド＞（前書き）

更新遅いと言いながら、次の日更新。 逆もあるから気をつけて！

二話 冒険者雇用機関＜ギルド＞

世界は彼女にとって悪い事ばかりではない、例えば冒険者雇用機関『ギルド』だ。

世界中至る所に蔓延るモンスター、その退治や希少なアイテムの調達、果ては近所の庭掃除や子供のお守りまで。

そんな中で彼女が目をつけたのは、『賞金首であろうと登録可能』と言う点である。

賞金首、文字通りその首に賞金が掛かっている者達のこと。

ここで多い勘違いは賞金首が犯罪者、と言う事である。

確かに大半が犯罪者ではあるが、犯罪を犯していない者も賞金を掛けられる事がある。

最も多いのは個人の私怨であろう、あいつが憎い、こいつが憎い、自分じゃ手を出せないから他の奴にしてみよう。

そう言う意図で賞金を賭ける者が居る、勿論賞金を掛けた人の名前は公開しなくても良いようになっているからよりやりやすい。

彼女は他にもメリットを見出し、ギルドに登録する事を決める。

登録された者は大体仲間として見られ、国からの情報提供すらも断る事が出来る。

そのためギルドの事を『国を持たぬ国』と言われる事さえある。ギルドに対して大きな不利益を齎すならなら情報提供をする時もあるが、そうでない場合は殆どが断られる。

やり様によってはギルドを盾に出来る、そう考え彼女は登録に向かった。

「……………」

頭からフードを被り、受付カウンターまで歩く。
ギルド内部は酒場の風体をかもし出している、フードを被った人物など珍しくないのか全く注目されずにカウンターまで辿り着けた。そうしてカウンターの前、カウンターの向こう側に座る女性に話しかける。

「すみません、賞金首リストはありますか」

「いらっしゃい、あるわよ。　ちよつと待ってね」

受付の女性は立ち上がり、背後の本棚から一冊の本を取り出す。それを持ってカウンターに置いた。

「賞金首を狩るの？　最近は大金を掛けられる奴が全然居ないから薄いわよお？」

「……………そうなんですか」

本、賞金首リストを手に取りその場で目を通し始める。

「……………」

1ページ1秒も掛からず流し読む。

顔写真、手書きなんだろうか賞金首の顔と名前、大よそのランク、賞金額が載っている。

さっさっさつと目を通し終える、そうして本を閉じる。

（載っていない）

本をテーブルに置いて、受付の女性に尋ねた。

「これは最新版ですか」

「ええ、昨日更新されたばかりの物よ。誰か狩りやすそうな賞金首でも居た？」

昨日更新されたばかり、やはり大々的に追いかけられないか、或いは賞金を掛けるのに手を拱いているのか。

受付の女性が言う通り最近賞金首が増えていないらしい、どちらにしろチャンスには変わりない。

「……すみません、冒険者への登録したいのですが」

「え？ 貴女ギルドに登録してないの……？」

「はい、今日初めて」

やっちゃったと言った風に額を押さえる受付の女性。

「登録ね、すぐやっちゃいましょう！」

「……？」

「ほらほら、まずこれに手を置いて！」

カウンターに置いてあった青い光を放つ球体、恐らく水晶のような物体を指差す。

言われた通り掌を水晶に乗せる。

「貴女の名前、得意な得物、魔術の心得の有無、それを思い浮かべて」

……得意な武器、馴染むのは右手の『刀か大剣』、魔術の心得は無い、行使された事なら何度か有るけど。

「はい、良いわよ。 ふむ、出身は……『にほん』？」

「……はい、極東の島国です」

「聞いた事無いわねえ、失礼だけど結構な田舎？」

「そうですね、知ってる人は殆どいないですね」

「大海超えてきたの？ 無理するわねえ」

「死ぬかと思いました」

「あはは、あれを超える度胸があるなら、そこら辺のモンスターなんて目じゃないわねえ」

そんなに凄いのだろうか。

「私の口から説明を聞くのと、この『冒険案内書』を読むのと、どっちが良い？」

「両方で」

「珍しいわね、大体は冒険案内書だけで済ますのに」

「ご迷惑でしたら書物だけで」

「いえいえ、暇だから説明するわよ」

「ありがとうございます」

腰を折って頭を下げた。

彼女にとってこの仕事は結構暇なモノでしかない。

日がな一日中座りっぱなしで、むさい男たちの相手ばかり。

女性としては珍しい、冒険に憧れや楽しみを見出した彼女。

そう言った事もありギルドの冒険者登録をしたのだが、余りの壁

の高さ、女性がやっていける世界ではなかった。

最低のEランク、ミニゴブリンと言う最下級のモンスター一匹で死に掛けた。

死の恐怖を味わえば、殆どの者が再起不能、二度とやっていけなくなる。

彼女もそれを味わってしまった、しかし。

『無理ね、ギルドの受付にでも転職しようかしら』

と極簡単に立ち直った、正直彼女に足りないものは才能だけだった訳で。

楽観的というか、精神的にかなり強かったりしていた。

精神系の魔術にかなりの抵抗を示した事から、あっさりギルドの受付嬢として再就職できたのが彼女がここに座っている経緯。

そんな彼女、名は『ベリル・マルトー』。

面白い冒険話でも聞けるかと思っていたのに、全然そうではなかった。

『はあ、やっぱ採取系の冒険者やってりゃ良かったかしら……』

このギルドに来るのはDや高くてもCランクの冒険者ばかり。

手に汗握る冒険活劇など聞けるわけも無く、毎日現実感の無いつまらない誇張話ばかりを聞いてだれていた。

こんなのがずっと続くかもしれない、そんな漠然とした不安。

本気で止めようかな、そう思い始めていた時に、世界が変わる人物と出会ってしまった。

「すみません、賞金首リストがありますか」

いつの間にかカウンターの前に立っていた人物、全身を覆うローブに、顔の上半分以上を隠すフードを被った存在。

声からして女性、フードの下から見える口元は整い、美人であると簡単に推測できた。

何よりその希薄さ、話に聞く高ランク冒険者は無駄な存在感を放たないと聞いた事がある。

「いらっしやい、あるわよ。　ちよっと待ってね」

これは高ランク冒険者なのかしら、とおかしな期待を抱く。

さらには女性で、賞金首リストを要求してくるなんて、やっぱり高ランク冒険者だろうと決め付けた。

「賞金首を狩るの？　最近は大金を掛けられる奴が全然居ないから薄いわよお？」

「……そうなんですか」

そう言っでリストを取る手は、綺麗な肌。

もしかして、凄腕？

冒険者とはいろいろな場所に赴く、無傷でいられる事など殆ど無い。

特に手は怪我を負いやすい、武器に振るうにしろ、アイテムを採取するにしても。

治癒魔術だってかなりのランクで無いと、傷跡を消す事は出来ない。

「……………」

手に取ったリストを開き、ぱらぱらとただ頁を捲る様に流していく。

一分も掛からず、分厚い賞金首リストを捲りきる。
どう見ても手馴れている、大物の予感。

「これは最新版ですか」

「ええ、昨日更新されたばかりの物よ。誰か狩りやすそうな賞金首でも居た？」

自然に笑みが浮かぶ、もしかしたら面白い話でも聞けるかもしれないと内心心躍った。

「すみません、冒険者への登録したいのですが」

そうして耳を疑う。

「え？ 貴女ギルドに登録してないの……？」

「はい、今日初めて」

冒険者じゃない？

只者じゃないと当りをつけ、勝手に冒険者扱い。

ギルドに登録していない人以外に見せてはいけない賞金首リストも見せてしまった。

これはまずい……。

「登録ね、すぐやっちゃいませよ！」

受付の仕事がクビになり、罰金を払う羽目になる。

止めようかなあ、と思っていたが実際そうになると生活に困りそうだから焦る。

「……？」

「ほらほら、まずこれに手を置いて！」

それなら登録後に見たって事にしてしまおうと、罰則から逃れようとした。

この子の存在感に押されたとか、勘違いさせる風貌なのがいけないのだ、とか。

有体に言えば少女を理由に逃げようとした、まあ少女がギルドに登録しなくても罰則はされなかったのだが。

「貴女の名前、得意な得物、魔術の心得の有無、それを思い浮かべて」

ローブから覗かせた白い手を、青い光を放つ登録球に乗せたのを確認して登録用羊皮紙と連動させる。

薄茶色の羊皮紙に浮かび上がってくる黒い文字、全ての項目が埋まってから羊皮紙を取る。

「はい、良いわよ。 ふむ、出身は……『にほん』？」

名前に使える武器、魔術が使えるかどうかなど見る。
年齢は……十七。 出身は……聞いた事が無い地名。

「……はい、極東の島国です」

「聞いた事無いわねえ、失礼だけど結構な田舎？」

国外の事もある程度知識に入れておかないといけないこの仕事、やはり全部ではないが主要な国の首都は知っている。

となると、知る必要が無いほど遠い地域なのかしら。

「そうですね、知ってる人は殆どいないですね」

島国と言う事はあの『大海』を超えてきたと言う事なのかな、あんな巨大な津波を死なず超えるなんて運が良すぎる。

あの大津波を超えようと、年に数百人が飲まれて海の藻屑と消えているのに。

「大海超えてきたの？ 無理するわねえ」

「死ぬかと思いました」

「あはは、あれを超える度胸があるなら、そこら辺のモンスターなんて目じゃないわねえ」

遠くの海岸から見てもその巨大さが分かる大津波、それを体験しておいて『死ぬかと思いました』だけで済ますとは。やっぱりこの子は凄いのかもしれない。

「私の口から説明を聞くのと、この『冒険案内書』を読むのと、どっちが良い？」

「両方で」

「珍しいわね、大体は冒険案内書だけで済ますのに」

「ご迷惑でしたら書物だけで」

「いえいえ、暇だから説明するわよ」

「ありがとうございます」

そう言って丁寧に腰を折って礼をする少女。

頭を下げるときにほんの少し見えた顔は、とても綺麗な、人形のような顔だった。

「……これは凄いわね」

簡単な登録だと言うのに、知られたくない項目まで書き込まれたのは想定外。

自身で書き込むのだと思っていた、水晶に手を触れ思うだけで書き込まれるなんてファンタジーを過小評価していた。

「何がですか？」

「いえ、あなたって可愛いわよねえ」

「ありがとうございます」

「嫉妬しちゃいそうな位だわ……、こんな事言ってる場合じゃなかったわね」

そう言って受付の方は人差し指を立てた。

「冒険者には大きく分けて二種類、討伐系と採取系の二つがあるわ」

文字通り、モンスターや賞金首を倒したり捕まえることをメインとする冒険者と、希少な薬草や鉱物を秘境に入って取ってくる冒険者に分けられる。

どちらか片方を専門として動くのが殆どだと言う、両方こなすのはかなり難しいとの事。

肉体を鍛えてモンスターや賞金首を狩る方が簡単、採取系は目的の物を取るためには様々な知識が必要だからだ。

両方こなす人物も勿論いるが、その全てが例外なく高ランクだと言う。

「どちらかを選ぶ前に一つ試験があるの、討伐にしろ採取にしろ、

モンスターと戦う確率が高いから」

「確かに」

「この試験で直接戦う事に向いてない事が分かったら、採取系をお勧めするわ。 モンスターが出没する地域に採取に行くとき、討伐系の冒険者とパーティを組めば良いんだし」

「はい」

「……とりあえず試験を受けておく？ 剣を使えるって言うんだから、それなりには戦えるんでしょうけど」

「お願いします」

受付の方は笑顔で頷き、カウンターの向こう側で書類を片付けていた人に話しかける。

一言二言、話している最中此方に視線を向けられたので頭を下げておく。

その受付の方と喋っていた男性は何度か頷き、さらに奥へと消えていく。

「待たせたわね、それじゃああそこのドアから訓練場に行ってくれる？ そこで教官が待ってるから」

「はい」

もう一度頭を下げ、指差されたドアへと歩き出す。

「頑張ってねー」

そんな声を後ろ耳で聞きながら、ドアノブへと手を掛けた。

「お前さんが申し込んだ奴か」
「はい」

扉を抜け、少々長い廊下を通り、また扉を抜ければそこそこ広い青空天井の、イタリア、ローマのコロッセオに似ていなくも無い。その訓練場の入り口に、少々いかつい、薄手の鎧を着た男性が立っていた。

「女、か。 ベリルと同じ口か」

「ベリルとは？」

「ああ、受付の奴だよ。 あいつは冒険者にあこがれて登録したんだが、戦いの才能がなかったんでな、冒険者辞めてギルドの受付嬢をやってるのさ」

「なるほど」

「で、同じ口か？」

「いえ」

「危ない冒険者やるってんだから、それなりの理由があるってか」
「……………」

応えない。

「…………まあいいか、とりあえず武器を選べ」

顎で差された方向、視線を向けると様々な武器が収められているケースがあった。

それに歩み寄り、一通り目を通す。

やはり安全対策に刃が潰されている、潰されていない武器を使えば訓練とは言え死ぬ可能性もあるから当たり前か。

「……これを」

無造作に取った柄、それは剣、ブロードソードと言われる種類の剣。

同様に刃が潰されている。

それを持ち引きずりながら教官らしき男の元へ戻る。

「おいおい、そんな持ち方してからに。 本当に使えるのか？」

「はい」

「最初っから訓練受けたほうが良いんじゃない？」

「必要ありません、私は指導を受けに来たのではないんですから」

「……はあ、人の好意は受け取っとくもんだぜ」

戦いを知らない初心者、私の事をそう言った目で捉えている。

高ランク相当の実力を持つ、ギルドに登録していない人が来た事などないのだろうか。

そんな疑問を他所に、教官は腰に下げていた武器、剣と小盾を手にとって訓練所の中心へと歩き出す。

「ま、男でも女でも冒険者は関係ないか、少し痛い目に遭って分かって貰うしかないな」

構えて教官が立つ。

「もう良いですか？」

剣を引きずり、教官に歩み寄る。

「おう、掛かって来い」

「では」

一步二步三步、剣の切っ先引きずり、5メートル、4メートル、3メートル。

そして最後の一步、右腕を無造作に、まるで子供が小枝を振るように。

ローブを翻しながらソードの切っ先が地面を抉り、左手に小盾を構える教官に襲い掛かる。

「——ッ！」

教官が浮かべた表情は、驚愕。

高速で切り上げられたソードが小盾に当たり、飛んでいきそうになる小盾を力付くで押さえつける。

ソードの刀身を左肩に乗せるように、右下から左上へ軌跡を描いた剣が、左上から右下へと逆行。

さらに一步踏み込んで、剣が袈裟懸けに翻った。

「ヌッオォ！」

予想以上、寧ろ自分以上の剣筋を描いた少女。

剣の軌跡をずらすために出した片手剣が右手から消失、弾かれて飛んでいった。

教官の男は、良く逸らしたと自分を褒めてやりたくなっていた。ボンッとおかしな音を聞いて一言。

「……合格だ、俺の手に負えねえじゃねえか」

「ありがとうございます」

やはり少女が持っていたブロードソードの切っ先は、地面を抉り埋まっていた。

「もう終わり？　どうだった？」

「合格だそうです」

あの後直ぐに試験合格証書を渡され、すぐに追い出された。

『もう用はねえだろ？　これさっさと渡して登録して来い』と言われた。

かなり手加減した事がばれたのだろうか。

「はい、証書はこっちな」

私は証書を手渡し、ベリルさんはカウンターに戻る。

「……はい、これで冒険者として登録されたわ。登録したばかりだから、貴女のランクは一番下のEよ。依頼をこなせばこなすほどランクが上がるわ、高ランクになれば、たまにだけギルドから直接の依頼が入ったりするわ」

EランクからDランクに上がるには、Eランクの依頼を10回こなせば無条件に上がる。

また、Eを10回こなすのではなく、一つ上のDランクの依頼を3回こなせばDランクに上がれる。

最後にもう一つ、さらに上のランク、Cランクをこなせば一発でDに上がれる。

ランクが上がればこなす階数も増える、例えばAならBを50回

以上と言う訳。

パーティを組んでも良いが、一定期間一定ランクの依頼を成功させなければランクダウンもあるらしい。

「あっちがギルドが常時受け付けている依頼、向こうの掲示板にあるのが外からの依頼ね」

振り返って指差された方向を見ると、大きな掲示板が5つ並んでいる。

それと反対方向に同じ様な掲示板が並んでいる。

「出入り口に近い掲示板が低いランクの依頼よ、こっちに近い掲示板ほどランクが高くなるから気をつけてね」

「はい、色々有難うございます」

「良いのよ、仕事だし。……そうね、貴女がこなした依頼の話でも聞かせてくれれば」

「分かりました」

お辞儀、早速掲示板へと足を運ぶ。

ギルドに入ったのはもう一つ目的があったから。

お金が必要だからだ、どこかの店でゆっくりと働く事は出来ない。

そうなれば出来るだけ行動期間が短く、大きなお金が入ってくる仕事など犯罪のような物しかない。

そのほかもう一つの仕事、それがギルドであり依頼でもある。

出来るだけ早急にお金を手に入れるのは、この体を使ったものが一番良いだろうと考える。

モンスターにも賞金が掛けられており、並大抵のモンスターなら一撃で下す事が出来る。

そうすればまともに働くより数倍、数十倍の速度で数倍から数十

倍の金額が手に入る。

あの子達を解放するには、お金が必要。

「……………」

ざっと目を通し、Bランクの掲示板に視線を戻す。

『オークの討伐…一匹に付き金貨10、指定期間無し』

それが目に入った。

「……もっと早くここに来ればよかった」

この街、魔術大国と言われるルーテトラ王国王都、『バテントレ』に来る途中で豚の頭を持つ亜人『オーク』を何十体も切り伏せてきたからだ。

もしこの依頼を受けていたら、千数百枚の金貨が手に入っていたと言うことになる。

……惜しい事をしていた、ギルド依頼のそれを手に取り、カウンターへと持っていく。

「もう依頼を受けるの？」

「はい」

「どれどれ、何の依頼かしら……、Bじゃないの」

「はい、ここに来る途中で何体も倒しましたから」

「Cランクの冒険者が、一匹倒すために5人必要な、オークを？」

「はい」

「んだよ、道理であんな強いわけか」

カウンターの向こう側、頭を出したのは先ほどの試験の教官。

「お前さんなら20匹ぐらい簡単そうだな、受けるからさっさと行ってこいよ」

「ちょ、あんたは受付じゃないでしょ。勝手に触らないでよ」

「良いんだよ、ほら、受注書だ。一匹でも百匹でも良いから倒したら豚鼻を切り取ってこいよ」

「はい、それでは」

手渡された依頼受注書、怒るベリルさんを視界から外し、それを懷に仕舞って出入り口へと向かった。

「何で勝手な事するのよ！ Bよ、B！ オークなんて相手にしたら死んじゃうじゃないの！」

男、このギルドの教官、『グレニー・トットン』の手を払う。

「あいつがオーク如きにやられる何ぞ思えねーよ」

「女の子よ！？ あんな豚相手……」

「その豚を一発で殺れる俺が、その女の子に一瞬で負けたんですけどー」

「……え？」

「正直嘗めてたわ、剣の握りはなっちゃいねえーし、構えも無い。ド素人もいい所だと思ったんだけどな、いざ始まればあっさり剣を飛ばされちゃったよ」

負けた？ Aランクのこいつが負けた？ 一瞬で？

「あれならさっき言った通り、100匹は殺してくるんじゃないかなうかね」

「そんなに凄かったの？」

「俺の自信を砕かれた、引退したとは言え堪らんぜ。実践だった一発で死んでたな、才能の差かねえ」

はぁ、とため息を吐くグレニー。

こいつがこんなに落ち込むなんて、本当に一瞬で負けたのかしら……。

「じゃあ……私が感じたのは、本物だったわけ」

「あん？」

「初めて見た時凄そうな感じがしたから。……そうそう、顔見た？」

「フードを全く揺らさないのに、どうやって顔の覗くんだよ」

「ひひひ、あの娘。めちゃくちゃ可愛いわよ」

そんな私の笑い声を聞いてグレニーは眉を潜める。

「気持ち悪い笑い方をするな」

「いいじゃないの、お人形みたいだったわぁ」

「へーへー」

「ふっ、あんただってしっかり顔見たら、口を開けて驚くに決まってるわ」

「はいはい、楽しみですわねー」

グレニーは踵を返して、受付の外へ出て行く。

「あんな娘、妹に欲しかったわ……。そうだ、帰ってきたら顔見

せてもらいましょ！」

「顔隠してるんだから、ほいほい見せてくれるなんて思うなよ」

「見せびらかす訳じゃないし、私しか見ないんだから見せてくれるわよ」

またもひひひと笑うベリルの視線は、先ほど出て行った少女へ向けられていた。

三話 討伐＜クエスト＞（前書き）

流れに乗るのは基本。

三話 討伐＜クエスト＞

軽やかに、軽い駆け足で走り寄るのは少女。

進む先には豚の頭を持つオーク。

フワリとローブは広がり、中から現れたのは黒い刃。

右腕が変化したブレード、切れ味を最重視したそれが二度空を奔った。

「これで三十」

「ぶぎょ？」

いつの間にか目の前に現れた存在に、オークは首をかしげる。

いつ現れたのか、そんな疑問は直ぐに消えた。

とりあえず殺しておこう、そんな浅い考えしか持たない一匹の亜人。

だが目の前に居た人間は、背中を向け離れていく。

「ブギャア！」

追いかけて叩き潰そう、そう考え実行した時に漸く自身の異変に気が付いた。

足を出そうとした倒れた、オーク自身の主観で見ればそのような感じだろう。

だが、端から見ればそんな生易しい物ではなかった。

起き上がろうとしても起き上がれない、両手を使って体を起こそうとしても左手が動かない。

「ぶぎょ！」

何とか首を動かし、自分の下半身を見れば真っ赤。

あったのは断面、赤い液体と、赤に塗れたピンク色の物体がこぼれ出ていた何か。

「ブフフ？」

よく分からないといった感じに、オークは鼻息を鳴らす。

「ぶぎィ……！」

鈍い脳は漸く警鐘を鳴らし始める、このままでは『死ぬ』と。遅い鈍痛から始まり、次第に大きくなり激痛となる。

「ビギィ！ ビギュィ！」

悲鳴を上げながらやっと気が付いた、自身の体が真っ二つになっているのを。

「ブギュア！ ブグギュウ！！」

少女が放った二撃は、袈裟懸けの一撃と、鼻を切り落とす一撃。たったそれだけでBランクモンスター、オークの命を奪った。

オークは厚い皮下脂肪や、種族特有のタフな耐久力を持つ存在。それゆえにこのオークは、地獄の責具に匹敵する痛みを味わい事となる。

脳が直接叩かれているような苦痛を、タフなお陰で20秒近くも味わい続けた。

苦しみ苦しみ苦しみにぬいて、やっと絶命して、その苦痛から逃れる事となった。

「まだ居るかしら」

背後から聞こえるオークの断末魔を聞きながら、他に居ないか探し始める少女。

ローブの下にある刃となったその右腕には、オークの血が一滴も付いていない。

分厚い鉄をも簡単に両断する非常に鋭利な刃に、非常に高い撥水性を持つ表面にて一切の水分が付く事を拒む。

一本の刃が五本の指を持つ手に戻り、波が引くように黒色から肌色へと戻る右腕。

戻った右手で腰につけていた袋を取り、袋の口を閉めていた紐を外す。

「……あと1200」

開いた袋の口、その中に何かが落ち入り込んだ。

それを確認して口を閉じ、紐でまた締める。

その厚手の袋はギルドが支給した、討伐部位保存袋。

要するにモンスターから剥ぎ取った討伐証明、オークなら切り取った鼻を入れておく袋だった。

魔術的な加工がしており、血が袋から滲み出てくる事が無い中々便利な袋。

壺よりは高いが、水を入れて置けたりするので水筒の样にも使える。

そんな便利な袋ではあるが、彼女はそれを水筒代わりに使っていない。

ベルトを使い腰に下げているバッグ、大きなサイドポーチ、あるいは腰に下げるリュックサックのような物。

それに右手を入れ、目当ての物を引っ張り出す。
それはこの世界では絶対お目にかかれぬ異世界の物、『魔法瓶』であった。

その魔法瓶の表面には、日曜日の朝に放映している少女アニメのキャラクターがプリントしてある。

小さい子供、小学校に上がる前の少女が使っていた魔法瓶。

蓋を開け、中身を零さないよう閉めてある赤いボタン付きの、白い蓋が見える。

その赤いボタンを押して、初めに外した蓋をコップ代わりにして水を注ぐ。

それに口をつけ、水分を取り、蓋を閉める。

「……ありがとうございます」

蓋を閉めて魔法瓶に感謝の意を述べる。

正確には魔法瓶に対してではなく、所有者たる小さな女の子に対しての物だった。

初めてその少女と話をした時には、「パパはどこ？ ママはどこ？」と泣いて両親を求めている。

わんわんと泣く少女を抱きかかえ慰めて、どうにか泣き止んでもらった。

この小さな少女がどうしてここに居るのか、そうして話している内に聞いた話。

『ぱがやすみだから、ぴくにつくにいこうって、ままがかつてくれたの!』

私のひざの上に乗って、そう嬉しそうに話す小さな女の子。お気に入りだったのだろう、ピクニックを楽しみにしていたんだろう。

その楽しみにしていたピクニックの最中に事が起こった。

何が起こったのかわからなかっただろう、話によると目が覚めた時にはここに居た。

小さな女の子と、その彼女の両親は異世界に『召喚』されてしまったのだ。

両親と少女は無理やり引き裂かれ、気が付いたら一人だった少女はわんわんと泣く。

そうして私と出会った。

大粒の涙を流す少女、両親に合わせてあげたいと願うが聞き入れられる事など無い。

母親代わりにあやし、寂しくないよう接し続けた。でも、それは長くは続かない。

小さな女の子は連れて行かれる、「お姉ちゃん!」と叫び、泣き叫びながら連れて行かれる。

私は見えている事しか出来ない、止めてと叫んでも、聞き入れられることは無い。

そうして少女と私は二度と会えなくなった。

「……………」

私がここから出て行く時、連れて行かれた人たちがどうなったか調べた。

探し出して手に取ったリストにはたくさんの名前とその人物に行った事、その行った事の結果が書かれていた。

探して探して、少女と、その両親らしき夫婦の名前を見つける。

『鈴木 亜矢華くすずき あやか>、術式に耐え切れず『死亡』、処分』

それを見てあの子はもうこの世に居ない、そう認識してたくさんの涙を流した。

泣いて泣いて、涙が枯れた後に少女の遺品を見つける。

それが話していた魔法瓶だった。

だから感謝を掛けると同時に、謝罪を掛ける。

『あの時助けて上げられなくて、ごめんなさい』と。

彼女は歩く、獲物を探して。

あの時とは違う、救える力があるから救う。

手のひらから零れる命は逃さない、救い包みきる。

自己満足的、それを理解しての都合の良い贖罪でも有った。

安を煽る事となる。

「間に合わせる」

森の中をオーク探して歩き回る。

まだ幾ばくかの猶予はあるが、余り長引かせるのはあの子達の不安を煽る事となる。

本当なら今すぐにでも向かいたいのだが、あの子達を解放するた

めのお金が足りない。

そう考えるとやはりギルドに登録したのは正解だった。

このオーク討伐の依頼を受けてまだ半日しか経っていない、それなのに金貨300枚が確保できた。

冒険者は一攫千金と言う言葉が似合う、実力さえあれば今みたいに大金を手に入れられる。

余り信じたくは無いけど、こうなってしまったのは運命か。

とりあえず今やることは決まっているから楽。

そう、今周りから迫ってきている存在を殲滅する事。

腰の荷物を支えているベルトを外し地面に置く、それと一緒に討伐部位保存袋を置く。

置いて直ぐにも聞こえてきたのは鼻息、「ふごっふご」と醜い亜人の鼻息が。

頭を動かし周りを見る、暗い森の影から現れるのはやはりオーク。

一匹や二匹ではない、二桁の数が現れた。

そうして考える、手間が省けたと。

「……？」

直ぐにでも襲ってくるかと思ったが、一定の距離を置き周囲を囲むだけ。

何かを待っているよう、実際に待っていた。

「ふぐい」

囲んでいたオークの一角が割れ、ゆつたりと現れたのはオーク。そのオークはサイズがおかしい、ただでさえ2メートル弱と言う大きなオークの倍以上もある巨大なオーク。

「……グレート」

これは褒めていたりするわけではなく、その巨大なオークの種族名、『グレートオーク』。

大きい、偉大な、と言う意味の冠詞が付いたオーク。

通常のオークがBランクに対し、グレートオークはAランクに位置するモンスター。

一匹だけでうろつくモンスターではなく、オークの群れの長として君臨している事が殆どのモンスター。

「賞金付いていたかしら」

オークは一匹金貨10枚と言う賞金が掛けられていたが、グレートオーク討伐に賞金が掛けられていたか覚えていない。

覚えていないから賞金が掛けられていないとも考えられるけど……。

「ふご、ふご……」

そんな考えをしていれば、グレートオークが鼻をヒクつかせ、なにかの匂いを嗅ぎ取っている。

数秒鼻が動いた後、視線が袋、討伐部位保存袋に落ちた。

「ブゴ、プギィ」

袋から漂う血臭でも嗅ぎ取ったのか、私を標的として定めたようだ。

オークの輪が狭まり、私を殺そうと動き始める。

あの袋から仲間の匂いがするからとりあえず殺そう、そういった

考えか。

当たっていいようが外れていいようが関係ない、狩る側と狩られる側はすでに決まっているのだから。

「――」

そうして動く、集団戦となると動きを阻害するローブは邪魔。素早く胸のローブの紐を解き、脱ぎ置く。

少し汚れているローブの下から現れたのは『黒』。

暗い森の影よりなお暗い、黒髪の化け物。

これよりは殲滅戦、一体も残さず殺し尽くす、殲滅戦。

最初に動いたのはやはり彼女、白くきめ細かな肌を持つ彼女の両腕が変色、変質、変化。

グレートオークが居る一角の反対側、そこへ振り向きながら右腕を振る。

滑らかに、一片の淀みも無く一瞬で腕が伸びた。

その形は『挟み取る鞭くウィップ』、剛力による強大な遠心力を持ってオークの輪に牙を向いた。

「ブギヤアイ！！」

「ピギヤア！！」

まずは複数、7匹のオークの足が切断されて転がる。

次に足に当たらなかった4匹のオークは、それを胸や腹に食らい、肉や内臓を挟み千切られる。

そして最後にウィップは当たったオークの腹に食い込み、先端から数十の棘が飛び出て、内部を蹂躪する。

「ブギヤギヤ！！」

断末魔に近い悲鳴をあげ、それでもなおウィップを抜こうとするオーク。

少女はそれを許すはずも無く、野球のサイドスロー＜横手投げ＞のように腕を振るう。

食い込んだウィップの棘がブチブチと肉を抉り潰しながら、体重200キロもあるオークを引っ張り飛ばした。

それはまるでボウリング、突っ立ったままのオークたちをピンに見立て、投げられたオークをボールに見立てる。

「スぺア狙いかしら」

投げられたオークが他のオーク、5匹に当たって盛大の転倒する。その隙に駆け寄ってくる6匹のオーク、その手には木材で作られ上げられた棍棒。

それで叩きのめそうと少女に振りかぶる、が。

「ブギョ」

走り寄ってきた6匹のオーク、その先頭のオークが絶命した。

高速で突き出た左手の分厚いソードが、首から胸に掛けて貫いていた。

オークの胸を貫いているソードの中ごろ、これ以上刺さらぬよう十字鐔を作り出す。

そうして絶命したオークを盾にし、残りのオークに突っ込む。

突っ込んできたオークに突き刺さったままのオークにぶつかる、それを合図に右手にブレードへと変化させ、右手を突き出した。

「ブギッ！」

ソードに突き刺さったままのオークを貫通したブレードが、ぶつかったオークの心臓を貫いた。

苦しみの声を上げるオーク、それを無視して右手のブレードと左手のソードを瞬時に戻し、左足を軸として回転。

絶命したオークの体に回転蹴りを入れ、蹴り飛ばす。

「――スぺア」

先ほど投げ飛ばしたオークのように、蹴り飛ばされた死体が他のオークにぶち当たって転倒する。

ここで数えよう、戦闘不能になったオークの数は何匹？

「十六、十七、十八、十九……」

応えは『全て』、この場に居るオーク全て殺しきる。

それを行なう彼女の両腕が存分に役目を果たす、それは敵を殺す『武器』。

止まらぬ乱舞、量産される死骸。

見る間にオークが減っていく、減った数が四分の一になって漸くグレートオークが動いた。

「プギューイ！」

体が大きいからか、オークより速く駆ける。

「……………」

速く、背を向け輪から離れていくグレートオーク。

あれは逃げているのだろうか、……例え逃げているのであっても逃がす心算は無い。

右腕を引き絞るように背中に回す、そして力を込める。

黒い変色が肩まで回り、引き絞られた弓の弦が矢を放つように、右腕が振り放たれた。

「パギユッ!？」

一瞬で到達した右腕、ウィップがグレートオークの背中を食い破り、先端が棘を吐き出す。

「ギャグギユギユ!!」

背中、背骨を砕き、内臓と言う内臓を貫き蹂躪するウィップ。距離は30メートル近かった、それでもなお届きグレートオークの背中を粉碎した鞭。

それに蹂躪されたグレートオークは、ビクンビクンと痙攣しながら悶えている。

先ほどと似た状況、なら次の行動などすでに決まっている。

踏ん張り右手を力強く引っ張り戻した。

まるで引っ張り伸ばしたゴムのように、縮小する右腕の先に付いているグレートオークが凄まじい速度で少女のそばを通り過ぎた。

「バッ!？」

ウィップは体重500キロ、それ位あってもおかしくはないグレートオークを打撃部分とした『叩き潰す連接棍<フレイル>』に変化した。

超重の打撃、振るわれるグレートオークにぶち当たってオークは汚い声をあげ死んでいく。

まるで自動車に轢かれたように、大きく跳ね飛ばされてさらにオ

オークの数が減っていく。

右へ左へ、さらに上にまでも振り回し、立っていた最後のオークに向かってフレイルを振り下ろした。

振り下ろされた場所に、グシャツと言う音が鳴って、その場から音が消えた。

「ちょっとやりすぎたかしら」

周囲は凄惨たる状況、数十の樹木がへし折れ、数十のオークの死骸。

一対数十の戦いではなく、数十対数十の団体戦が行なわれたような様な状態だった。

「はぁ……」

切り裂かれたオーク、飛んでいったオーク、叩きつぶれているオーク、明らかにやりすぎた。

さらに何体か顔がグチャグチャに潰れ、討伐証明部位である鼻が剥ぎ取れない。

それを選別するのも時間が掛かった、日中でも薄暗い森の中がさらに薄暗くなっている。

日が完全に落ちれば真っ暗になるだろう。

もう少し押さえたいれば、今頃は王都のギルドへと戻っている帰路だったはずだ。

右手に手刀を作り、判別できるオークの鼻をそり落として袋へと

詰める。

倒したオークの数84匹、うち剥ぎ取れなかった数12匹。

金貨120枚も損をした事になる、12匹を倒す時間は3分と掛かってはいないがそれでもだ。

「……帰ろう」

やっと終わったと脱力して、森を出るため歩いていく。

ところがそうも行かなかった、オークを探してふらふら出鱈目に進んでいた為に帰りの道など全然分からない。

とりあえず真っ直ぐ歩く、そこそこの距離を進んだら木の上に登って方向を確認する。

それを繰り返す事十数回、漸く森を抜けたのだが日は完全に沈んでいた。

さらに森を抜けたからといって直ぐ帰れるわけではなかった、今度は街道をどちらに進めば良いのか分からない。

案内である立て札はないし、人が通るかかる事も無い。

もし進んだ方向が逆だったらさらに時間が掛かる、よって誰かが通り掛かるまで待ち惚けを食らった。

結局森を出てから三時間くらいは待った。

漸く、漸く人が通りかかり声を掛けたら盛大に驚かれてしまったし、散々な一日だった。

「……これ、討伐証明です」

時間にしたら24時を回っているだろう、そんな深夜にギルドにたどり着いて依頼をこなした事を告げる。

受付はリベルさんではなく見知らぬ方、やっぱりと言うか当たり前と言うか、交代制だった。

受注書と討伐部位保存袋を渡し、依頼の完遂、Cランクへのアップ、報酬金の金貨820枚を受け取る。

受付の方は今日、というか昨日登録したEランク冒険者がBランクの依頼を、それこそ馬鹿みたいに討伐してきた事に驚いていた。

Cランクへのアップも妥当であり、報酬金の820枚もオーク72匹の720枚、グレートオークの金貨100枚分だった。

「あと680……」

目標の金貨1500枚、それを一日で半分以上達成出来たからよしとしよう。

今日はとりあえず宿に戻って休もう、銀行に預けるのは明日で良いわね……。

そうして彼女はギルドを後にした。

三話 討伐＜クエスト＞（後書き）

ちよこちよこ加筆とかしています。

四話 得物くパートナー>(前書き)

一日一話！ テンション低いと無理っすよ。

四話 得物くパートナー>

「嘘、でしょ……？」

ギルド、ルーテトラ王国バテントレ支社の受付嬢、ベリル・マルトーは驚愕の表情を浮かべて呟き。

「つくく、本気でこんなに狩ってくるなんて……プツハハハハハ！」

その支店の訓練教官、グレニー・トットンは対照的に大笑いを出げた。

二人が視線を落とすのは、依頼受注書。

その依頼受注書は依頼完遂の判子が押されており、遂行者の名前とその結果、討伐したモンスターの数が書かれている。

「オーク72匹にグレートオークだと？　オーク100匹より凄

じゃねーか！　アハハハ！」

「まさかとは思うけど……、一人で？」

A Aランク以上の冒険者ならこれくらい出来るだろうが、問題を行った人物がEランクだったと言うこと。

勿論彼女だって、ギルドランクと実力に表示の差がある事位は理解している。

だがその人物は、武器や防具を着込むだけで動けなくなりそうな、細腕の少女。

どうしてもベリルには、この戦果と少女のイメージがかみ合わないのだ。

「こんな結果を出す奴に負けたってんなら、寧ろ清々しいな」

何とか笑いを押さえたグレニーが、荒い息で言う。

「グレニー、一瞬で負けたって言ってたわね？」

「ああ、ブロードソードを小枝の様に振り回すんだぜ。あれならAAランクの奴でも苦戦するんじゃないか？」

「やっぱり凄腕なのかしら……」

「『超』凄腕、だな。俺も人の事言えんが、見た目に騙されてあっさりやられる奴が増えそうだ」

「気になる、わね」

「顔が見たいし、素性を知りたいってか？ 止めとけ止めとけ」

顔が見たい、それならまだ笑って許してくれるだろうが。

深入った素性を聞くなど無神経にも程がある。

「女で顔を隠すフードの下は美人で凄腕って、どう見たって事情があるにしか思えないんだがな」

「う……ん、まあそうよねえ」

顔を見て寄ってくる男が煩わしいから顔を隠す、なんてこともあるだろうけど。

こう、何かしこりのような物が残り、今ひとつ納得できない。

どっかの貴族様、なんてのもありかしら……。

「まあ……、いいわ。まずはやれる事をやるんだから！」

「どうせ『ランクアップ祝いにく』とかだろ？ それで仲良くなつて聞きだそう、とか見え見えだぞ」

「良いじゃないの、純粹に仲良くなりたいたけなんだから」

やれやれとグレニーは肩をすくめる。

「あんま深入りすんなよ」

「それは私の勝手よ、まあ拒絶されるならささと止めるけど」
「すみません、余り関わらないでください」

後ろから聞こえた声に、え？ と声を上げて振り返った。
居たのはフードを被った、私より頭一つ分ほど小さい女の子。

「えっと、あの……聞いてた？」
「すみません」

隣では口を押さえ、必死に我慢をしているグレニーが居た。
こいつ、居たこと知ってたわね……！

「仲良くしたいと言うのはお気持ちは嬉しいのですが、正直に言いますと誰にも関わって欲しくはありません」

きっぱりそう言われた、ウワァーン！
隣ではグレニーが「それ見ろ、言わんこっちゃ無い」といった眼差しで私を見ていた。

本人が嫌だというなら、宣言通り手を引くしかない。
とても、残念だけど……ッ！

「……一つ、一つだけお願いがあるの！」

「何でしょうか」

「おいおい、関わるなって言ってんだから」
「グレニーはちょっと黙ってて！」

熾烈な視線ごとグレニーに顔を向ける。
それに押されたのかグレニーはまた一つため息を吐く。

「……あのね、貴女の顔が見たいなーなんて……」

「……それ位でしたら」

「ほ、ほんと！？ やったっ！」

喜びの余り軽く飛んでしまった。

「どれただだよ、お前……」

「いいじゃないの、女の子ってのは可愛い物大好きなんだから！」
「女の子？」

グレニーは私を上から下まで見て。

「……ハッ」

「クロス！」

掴み掛かった手を避け、グレニーは逃げていく。
追いかけてようとしたら。

「すみません、時間が無いので」

「ごめんなさい……」

つい謝ってしまった。

「見せても良いのですが、ここでは人目が」
「うーん、ならこっちに来て」

ギルドの事務所に入る扉、そこを開き裏に入れば完全な死角。
手を招いて、そこに呼び込む。
歩いてきて、影に入り左右を見渡す。

他からの視線は無い、見る為には近づかなければいけない。
見られない事を確認した後、少女はフードに手を掛けた。

「……嘘」

フードの下から現れたのは宝石。

ベリルの口から、そう無意識に零れるような存在。

少女でありながら大人、両方の線引きを曖昧にする最も不安定な年齢。

大人でありながら少女、両方の長所を兼ね備えた美貌。

喋らないで、表情も無くそこに座っていてもそれだけで絵に、まるで絵画の一枠のようなシーンを生み出す。

しかし、その無表情が崩れ、この顔が笑みを作れば、満開に咲き誇る華のような愛らしさが浮かぶんじゃないかしら。

「なにこれ、凄い……。触って良い？」

そう言った時には手のひらを彼女の頬に当てる。

「どうぞ」

嫌な顔一つせず、ベリルの要求を受け入れる。

彼女の頬に触れていた手のひらは、白く、弾力に富むその瑞々しい柔肌に吸い付くような感覚を覚える。

いつまでも撫でていたくなるような、病み付きになる感触。もう一つの手、左手が彼女の肩に掛かる黒髪に触れる。

手のひらに乗せた髪は、さらりと流れ零れ落ちる。

まるで砂、手のひらに乗るけど力を緩めれば指の隙間から落ちそうな、さらさらな黒髪。

しっとりとした肌触りは絹のよう、触れれば滑る、その表現が一

番似合う。

「……………」

凄い、どうしたこんな風に成れるのだろうかと本気で思案するほどの美貌。

これなら顔を隠すには十分すぎる理由となる、寧ろ隠しておかないととてもめんどくさい事になりそうなほど。

「その……、大変ね」

「いえ、そんなには」

こんな顔を持っている彼女に嫉妬では無く同情する。

この顔を晒して大通りを歩けば、火に群がる虫のように男が寄ってくるだろう。

路地裏を歩けば、邪な感情を持った男たちに囲まれるに違いない。そうしてベリルの心に火がついた。

「危ない……危ないわ、こんなの！」

「お前があぶねーって……」

ベリルの声を聞いて、グレニーが後ろから顔を出した。

「お前さんももう良いだろ？　いつまでもこいつ相手にしてたら時間足りないぜ」

「そんな事無いわよ！」

グレニーにそう言われ、パッと手を離れたときには、いつ動いたのか分からない速度でフードを被っていた。

「……………」

「おいおい、なんだそのすっごい残念そうな顔は」

「そ、そんな顔してないわよ!」

「説得無いがな、で、お前さんは依頼受けるんだろ?」

「はい」

全身を包む彼女のローブの下から、これまた依頼が書いてある紙を持った白い手が現れた。

「今度はグラーアントか、今度こそ100匹位狩ってくるのか?」

「居れば、ですが」

グラーアント、Dランクモンスターで体長30センチほどの大蟻。単体では戦闘訓練を受けてない一般人でも、武器があれば倒せる程度のモンスター。

しかし単体でうろつくような存在ではない、大体が三匹一組で居る事が多い。

酸を吐いたりするが、それも大した問題じゃない。

一番の問題は『連携』してくる事、一匹を倒にして残り二匹が挟み撃ちなどを平然と行うから厄介。

三匹一組ならCランクに格上げされ、数が増えれば増えるほど凶悪になるモンスター。

「昨日の今日よ? 少し休んでも……」

「時間が無いので」

一も二も無く提案を否定された。

「ところでお前さん、武器は? 結構良い武器使ってるようだから気になったんだが」

「……昨日の戦闘で碎けてしまいました」

「良い武器？」

「いやな、豚の鼻の断面が異様に綺麗だったから、中々の業物使ってるんじゃないだろうかってな。……しかし碎けたって、どれだけ強く叩きつけたんだよ」

一度振ってみたかったぜ、とグレニーが零す。

「代えの武器は有るのか？ 無いなら良い店紹介するが」

「お願いできますか？」

「おう、あの頑固爺もお前さんなら認めるだろうしよ。紹介状書いてやるから、少し待ってろ」

と事務所に入っていくグレニー。

「……それじゃ、こっちは受付しておきましょうか」

「はい」

少しばかり肩を落とし、ギルドカウンターに戻っていく。
カウンターを挟んで向かい合う。

「これに手を置いて」

「はい」

何時も通り個人認証の水晶球に手を置かせ、依頼の受付をする。

「これで良し、余り無茶はしないでね」

「ありがとうございます」

依頼受注書を手渡し、その上に重ねてグレニーが紹介状とやらを

差し出した。

「これもついでにな、この工房の親父は偏屈だから気をつけろよ。たぶん変な質問してくるが、思った通りに応えとけば良い」

「……はい」

「変な事されたらすぐ逃げるのよ!!」

「そんな事したら即閉鎖だつての」

「色々ありがとうございます」

「お前さんがどこまで伸びるか気になるんでな」

「グレニー、手を出したらどうなるかわかってんでしょうね?」

「……はあ、お前って奴は……」

心底呆れたようにため息を吐き、変な視線を向けてくる。

「な、なによ」

「まあ、今に始まった事じゃないか」

「だから何がよ」

「気にスナナ、少なくともお嬢ちゃんには手を出さねーよ」

「信じられないわね、いい? 変な事したら絶対に……」

「はいはい」

背を向けてカウンターから出て行くグレニー。

「ちょ、待ちなさい! 人の話を聞きなさいよ! あ、行ってらっしゃい、気を付けてね!」

「はい」

ギルド出入り口へ消えていく彼女を見送り、さっさと歩いていくグレニーを追いかけた。

「こら待て！」

手渡された紹介状、グレニー・ドットンの名が書き込まれた羊皮紙。

書かれている言葉は『こいつに合う武器を見繕ってくれ』、それだけ。

工房がある場所を記した地図も貰ったので迷いはしないけど。

「おお？　こんな所に一人の羊が」

人目に付かぬよう路地裏を通っていたため、柄の良さそうではない複数の輩に絡まれた。

「……………」

羊と表したことやらやはり良い輩では無さそう。

声を掛ければ喜ばせる事になる、なので素通りする。

「挨拶をしてんだから、無視するのは良くないぜえ？」

正面に回り込んでくるが、それすらも無視して路地裏を直進。

そうなれば必然的にぶつかる、そうして男がよろめき倒れそうになる。

「お、おい！？」

当たり前負けとは思っていなかったんだろう、多少驚きながら声を掛けてくるがやはり無視。

「ちょっと待ってっ！」

ぶつかったのを見ていた他の男が肩を掴もうとして手を伸ばしてくるが、それも無視、触れられぬよう避ける。

「ちょ、てめえいい加減にしろよ！」

こっちがそう言いたい。

遊んでと纏わり付いてくる子供の方がよっぽどマシな感じ。

「止まれつつってんだろ！」

ついには刃物まで、この国の王は傑物ではないらしい。

あのような事を認めた先王の息子ならば当然か。

国の王都でありながら、路地裏に入ればこの有様。

王の直轄地ではないのだろうか？　あるいは良い統治が出来ていないか、まあ後者でしょうけど。

「おい！　これが見えねエのかよ！！！」

進路上で刃物を構える男、やはり無視。

男に向かって歩を進める。

「て、てめえ！　聞こえてねエのかよ！！！」

一定の歩幅を崩さず、まるで刃物に向かって歩いているように進む。

刃物を構えた以上引けない男、刃先は此方に向いたまま。一步、また一步と男に近づく。

「ッ、おいしい！」

3メートル、2メートル、1メートル、そうして刃先がローブの中へと入り込んだ。

「っお！」

あっさりと刃物を構えていた男は当たり負け、尻餅を着いた。それと同時に持っていた刃物、ナイフを取り落とした。カンッと地面に落ちたナイフ、その刀身は根元から圧し折れている。

「え、なん……」

折れたナイフ、では折れた刃先は？

男とぶつかった地点から約5メートル程離れた後に、ガキンと甲高い金属音が何度かローブの中から聞こえてきた。

そうして別の甲高い音が響き、彼女が通った後に落ちていた金属。

「なんだそれ……」

呆然とそれを見る男たち、音を鳴らしたのはナイフの刀身。

複数鳴った音の正体、それは二度折れ四分割になっていたナイフの刀身であった。

「工房『黒刃金』」

これが目の前にある武器工房の名。

ああいう輩が出ると見越しておきながら紹介したんでしょう。武器がなければ戦えないって思わなかったのかしら。

「ごめんください」

木で出来た両開きの扉、それを押して店内へと入る。

中は薄暗く、少ないランプの光がやっと店内を照らしていた。

武器工房だけあって店内の至る所、天井にまで武器防具が吊り下げられている。

視線を戻して横長いカウンターを見ても誰も居らず、入店時にした挨拶にも返事は返って来ない。

「……………」

周囲を見回し、カウンターに呼び鈴を見つけ、それを押し鳴らす。

「……鳴らない」

カッン、カッンと鈴の音ではない、ただ金属と金属がぶつかっただけの音が鳴る。

しょうがない、大声で呼び出そうと思った矢先。

「何だ、お前さんは冷やかしか？」

ひよこつとカウンターの下から何かが顔を出した。

「……ご主人ですか？」

「ああん？ お前さんは俺が客にでも見えるってのか？」

「……いえ」

小さな、背の低い老人が居た。
ドワーフ？

「えっと、これを、紹介状です」

「紹介？ 誰だこんな娘っ子を紹介した奴は」

カウンターに置いた紹介状を手に取り開く店主。

「あのクソ坊主か」

「グレニーさんです」

「クソで良いんだよ、あの坊主は」

小さな店主は、紹介状を丸めて厚手にエプロンのポケットに入れる。

「で、お前さんに一つ聞くが」

「何でしょうか」

「武具は何だと思うね？」

武具は何だ？

武具は武具じゃないのかしら。

「……武具です」

「武具？ 武具は武具って何質問返してるんだよ」

「いえ、そう言う意味ではなくて」

「何だ？」

「武具は武具、ただ『武具』です」

「……なるほど、そう意味かね」

「はい、ただの武具です」

それを聞いたしわくちゃ顔の店主が「ホヒ」と笑った。

「なるほどね、気に入った。お前さんは何が使えるんだ？」

「どうやら正解したらしい。」

武具は武具、ただ武具であり、それを扱うのは様々な心を持つ生物。

要するに武具は『力』、振るうのは生き物であり、武具はただ振るわれるだけの力に過ぎない。

その力の方向性は武具に左右されない、善にも悪にも、振るう者の心次第と言う事。

「一応剣です」

「一応、ねえ」

とカウンターの下に引っ込み、ガサゴソと何かをしている店主。数秒も経てば頭を出し、剣の柄を差し出してきた。

「抜いて振ってみろ」

そう言われるがままに剣の柄を手に取り、抜き出す。

鈍色の鋼が姿を現し、ランプの光をその刀身に映し出している。

カウンターの前から四歩下がり、適当に振ってみる。

「……なんだそりゃ、ここまで風圧が届くってどうなんよ？ ああ

クソ坊主、変なのよこしやがって」

またカウンターの下にもぐり、ガサゴソ。

「お前さんが剣に求めるのは何だ？」

「……丈夫なのを」

「折れぬ曲がらぬってか？ 切れ味は要るのかよ」

「出来れば」

「なるほどね、お前さんは剣より刀の方が向いてるんじゃないの？」

そう言ってカウンターの下から頭を出す店主、その手には小さな店主の3倍はあろうかという長大な武器が握られていた。

「こいつでどうだ？ デカくて重いが折れぬ曲がらぬ、そして切れるって代物だ。 あんだけ剣を振り回せるなら持てるだろ」

大きな刀、いわゆる大太刀に属する刃物。

とても大きな刀身、私の身長よりも大きく長い。

「ん？ どうした？」

「……いえ」

とりあえず先ほど振った剣を鞘に収め、大太刀の柄を取る。

引けば刀身と鞘が擦れる音、抜き取れば鋼色……ではなく多少黒が混じっていた。

刀身の一部が光を反射していない、ランプの光を両断したような光を映していた。

「ホヒヒ、大昔のどっかの馬鹿がグレイニアル鋼を使って作った奴さ。 折れねーし曲がらねーし、竜くドラゴン>の火炎でも溶け

ねー代物を、これまた難しい製法の刀で作り上げちゃったのよ。
間違いない骨が折れただろうな、というか一生掛かった代物だろうよ」

物凄く大層な物らしい。

「……お幾らですか？」

「金貨5000だな」

「別のでお願いします」

そんなお金があるならすぐにでもあの子達を開放しに行っている。

「だろうな、そんな金出せるとは思わねえよ。流石に無料ってにはいかねえが、試用って事で貸してやる。竜や巨人<ギガント>相手なら折れるかもしれないがね、それ以外ならどんな外殻が堅い奴でも折れはしねえ」

「ありがとうございます」

「良いつてことよ、それを平然と持たれちゃ金貰おうとも思わないがな」

「……？」

「あん？ ……お前さん、それはどの位の重さかわかってるか？」

「……どの位でしょう」

それを聞いて店主が笑い出す。

「ホヒヒ！ 少なくともそこに飾ってある全身鎧の5着分はあるな
！」

ホヒヒ、ホヒヒと笑い続ける店主。

見ればその全身鎧、金属で過剰に覆われている。

「……そうなんですか」

「そうなんでよ、娘っ子にしちゃトんでもねーよね」

あの全身鎧は何キロぐらいなんだろうか。

「あのクソ坊主が紹介してくるのも頷けるぜ」

「グレニーさんは強かったんですか？」

「今もそこそこだがね、数年前は今の3倍ぐらい強かったわ」

どれだけ弱体化したんだろうか。

恐らく何かがあったのだろう、今の強さに落ち込んだ何かが。

「色々あってな。ま、俺が話して良いやつじゃないが、ホヒヒ！」

「……？」

「クソ坊主の死活問題さ、あんだだけ素直になれねー奴は不便だなあ、ホヒヒヒ！」

大層面白そうに笑う店主、何か笑いの琴線に触れることがあったようだ。

「……すみません、時間が無いのでもう行きますね」

「ホヒヒ……おう、しっかりばっさりぶち殺して来いよ」

「……はい」

物騒なことを言いながら、見送られる。

……私の存在も物騒だからかな。

四話 得物くパートナー＞（後書き）

それは剣というにはあまりにも大きすぎた。

大きく、ぶ厚く、重く、そして大雑把すぎた。

それはまさに鉄塊だった。

これの大太刀版、もっと重いけど。

五話 兆候＜シンプトム＞

「気をつけろよ、まだ居るかもしれないしな」

場所は平原、ひざ上まである草が生い茂っているから草原か。

ブロードソードを両手で構え、軽装の鎧を着た少年が背後の少女に声を掛ける。

「うんっ！」

少年の背後の少女は浅い空色のローブと、短い杖、ショートワンドを持っている。

その二人がいる場所の前方には、頭を叩き割られて動かなくなっている赤茶色の虫。

「まだ居る！」

「撃つよ！ 水よ、割り断て＜スペル・ウォーターエッジ＞！」

見つけると同時に魔術を詠唱し撃ち出す。

少女の前に水が吹き出るように現れ形作り、弾かれるように目標へと吸い込まれる。

鋭利な水の刃物は生え揃う草と一緒に虫、グラーアントを両断した。

「相変わらず良い狙いだ、ユリス」

「一杯練習したんだから」

褒められ嬉しそうに笑う少女、ユリス・フォロト。
笑いながら褒めた少年はケイン・ドレトン。

二人は幼馴染で、冒険者として登録したのは七日前になる。

ギルドでの初心者用訓練、グレニーの指導を受けEランク冒険者として成り立つ。

幼馴染と言う事でパーティ戦の訓練も受け、ケインが前衛、ユリスが後衛と二人組の冒険者としてポピュラーな陣形。

ギルドが推奨する初心者用、Eランク依頼を何度かこなし、そうして一人前の冒険者、二人はDランク冒険者になった。

何度かモンスター、ミニゴブリンも倒し実践も少しだが経験を積んだ。

ある程度の自信も付け、初めてのDランク依頼、グラーアント討伐を受けた。

一人でも十分に倒せるし、二人ならまず負けはしないだろうと考えた。

実際グラーアントと遭遇しても、全く梃子搦らず討伐できた。

まさに『楽勝』だった、これなら何匹でもやれる、そう思ってしまっただけで行った。

それは万全の状態であって、今多少疲れている状態ならそうもいかない。

「ちょっと休むか、戦いっぱなしだからな」

「うん、そうだね。『マナ』も少なくなってきたし」

体力は無制限じゃない、動き続けばそれだけ疲れる。

「退け、万魔の聖域<スペル・ホーリーサークレット>！」

森と草原の狭間に休憩できそうな場所を見つけ、モンスターが嫌う神聖魔法を張る。

これを張っていれば実力が近いモンスターが寄ってこなくなる。
流石に自分たちより強いモンスターは平然と襲ってくるけど、こ
の一带のモンスターはほとんどがDランク。

Cランクのモンスターは全くとって良いほど出て来ないから、
安心して休める。

そうして10分ほど休憩していた所に、遠くの方から草原に入っ
てくる人影を見つけた。

「同じ依頼受けた人かな」

全身を覆うローブにフードを被る、背中に何か長い物を背負った
人物。

同じ冒険者だろうか、ユリスの言った通りグラーアント討伐の依
頼を受けた人かもしれない。

多分討伐系、ここら一带は採取できるような薬草などなかったは
ず。

ランクは分からないが、その戦い振りを見て置くのも良いか、参
考になるかもしれない。

「何してるのかな」

「何だろ……」

ローブの下から手が出て、背中に背負う物を取ろうとしているが、
手が届かないようで何度か空振っていた。

失笑が出るような動き、実際二人とも少し笑ってしまった。

「まさか、あれ武器か？」

「流石に大きすぎるよー、訓練所にもあんな大きい武器置いてなか
ったよね」

見れば手が届かない背中から下ろしていた。

「……やっぱり、あれは武器だ」

背中の長い武器、その柄を掴み、鞘から引き出す。
煌く刀身、揺らめくように黒い何かが走っている。
遠目でも分かるほどの、威圧的な物体。

「……揺れてる」

「揺れて？ 真っ直ぐ立ってるけど……」

「ううん、あの剣から凄いマナが……陽炎みたいになってるよ……」

そう言われて睨みつけるように見るが、変わらず少しだけ反っている刀身があるだけ。

魔術的な視界なのか？ 余り魔術を使えない俺じゃそんな風に見える。
えない。

「うん、すごいよあれ」

「確かに、凄いな」

素振りなのか、あのでかい剣を振れば周囲の草が吹き飛ぶようになくなっていく。

「高ランクの冒険者なのかな？」

「どうだろ」

あんな物普通は振り回せない、スペル・パワーでも掛ければ行けそうだけでも。

少なくとも今の俺にスペル・パワーを掛けても、武器に振り回されそうだ。

「……やっぱり高ランクっぽいね」

あの大きな剣を振った音がこっちにまで届きそうな迫力で、草を刈り取っている。

「でも、何で低ランクのモンスター狩ってるんだろう？」

斬り飛ばされる草と一緒に、グラーアントの斬り飛ばされた部位が宙を舞っている。

「さあ……」

呟いた時にカチンと、音が鳴った。

「ッ！」

「え？」

何か堅い物がぶつかり擦れるような、カチンカチンと。それは先ほどまで戦っていたグラーアントの顎の音。反射的に立ち上がり、ブロードソードを構える。

「……いつの間に」

カチンカチン、カチンカチンカチン、カチンカチンカチンカチン、カチンカチンカチンカチンカチン、カチンカチンカチンカチンカチンカチンカチン。

鳴る音は重なり続けて耳を刺激する不協和音。

草が蠢く、明確な敵意を持って迫ってくる脅威。

十や二十ではない、それは3桁に優に届くグラーアントの数。

「嘘……、なにこれ……」

「どこから、数が多すぎる……!」

草々の間から見える赤茶色の波。

どこを見ても、萌黄色の隙間に見える赤茶色。

視界に入る草むら、その全てに草の萌黄色に混ざる赤茶色。

後ろの森からも、湧き出るかのように大蟻が現れ続ける。

「まさか……」

視線を向けた先、ローブの人のほうを見れば物凄い勢い剣を振るっている。

そうして飛んでいくのはグラーアントの死骸。

あの人はグラーアントを狩っているのではなく、『俺たちと同じ』ように囲まれているんじゃないのか。

「やばい……」

「ケ、ケイちゃん!」

立ち上がり体を寄せてくるユリス、この数は拙い、多すぎる。

「絶対に離れるなよ!」

「何でこんなにいるのお!?!」

落ち着け、こういう場合はどうすればいい……。

体を寄せているユリスは怖がって震えているし、まともに戦えそうじゃない。

ユリスは範囲魔術なんて覚えていないし、俺も広域攻撃技術をまだ使えない。

「……逃げるしかない」

「ケイちゃん！ ケイちゃあん！」

相手にしてれば間違いなく物量にやられる、死にたくなければ逃げられない。

じゃあどこに逃げる？ 今思いつくのは二つ。

一つはすぐ近くの森、もう一つは同じ距離の草原。

二つだが、どう見ても森は危険だ。

まず足場が悪い、それに草原以上に草木が生い茂って視界が悪い。

対する草原、ひざ上まで草が生え足元が見えないが、その先にあの人が居る。

今もなおあの大きな剣を振り、グラシアントを叩き斬っている。

振り回しているお陰で、周囲の草は背がかなり低くなっている。

あそこまでたどり着ければ、危険は一気に低くなるはずだ。

「……ユリス、魔術は使えるか？」

「使えるよお、使えるけどお！」

この数じゃ囀にもなれはしない、ユリスを逃がす為には一緒に動くしかない。

「良いか、全力で走ってあの人のそばまで行け。絶対に蟻はお前

に近づけさせない、だから全力で走ってくれ」

「……うん」

「魔術を使える限り使って走るんだぞ、振り向いている暇があったら前だけ見て走れ」

「……すん、わかった」

「よし……」

フッ、と呼気。

そうして精神高揚＜スキル・アップリフト＞を発動、身体能力を向上させる。

「行くぞ……」

「……スペル」

俺は両手に力を込め、ユリスは魔術を唱える。

「走れ！」

「ウォーターエッジ！」

水の刃が作られると同時に、はじき出されたように飛んでいく。風になびく草と一緒に、何匹かのグラーアントに当たって切り裂く。

一匹二匹、三匹と当たれば刃が崩れて水がはじける。

「スペル・ウォーターエッジ！ ウォーターエッジ！ ウォーターエッジ！」

「ハアッ！」

逃がすまいと群がってくグラーアント、俺たちが走るより早く迫ってくる。

「寄るんじゃねえ！」

ブロードソードを振り下ろし、側面から寄ってくるグラーアントの頭を叩き割る。

激しい衝撃、強撃＜スキル・パワースラッシュ＞を使い一撃で倒

しきる。

腕を無理やり振り回し、地面ごと叩き切る。

「ウォーターエッジ！」

湧き出る水の刃が、半狂乱のユリスがマナの有らん限り撃ち出し続ける。

「ウォーターツ！ ……もうやだあ」

詠唱を途中で止めたユリス、その声は涙を含んでいる。

徐々に足が遅くなっていく、それを見てケインは怒鳴った。

「走れえッ！！」

死にたいのか、その意図を含めた怒声。

その声にユリスは足で応える、死にたくないと全力で走る。

「ウオオッ！」

一匹、二匹と頭を割る。

焼け石に水、そう言ったレベル。

グラーアントの死骸を乗り越えて迫るグラーアント。

それはまるで仲間を殺された恨み、仇と言わんばかりに迫る。

これが一匹や二匹ならばどうって事は無い、ケイン一人で簡単に倒しきる。

だが現実はそのようではない、数は軽く見て100を超えている。たかだかDランク冒険者、そのランクと同等の実力しか持たない人間に三桁も居るモンスターを倒しきれぬわけが無い。

囲まれば死ぬ、ただそれだけしか未来が無い。

なのにだ、何故まだ二人が生きているのか。

そこには二人から離れている一つの存在、『彼女』が居たからである。

剛力、長大な刃が無尽に翻る。

草原の草、グラーアント、そして地面。

その三つが一撃の下に刈り取られ、切り裂かれる。

誰もが逃れられぬ死神の鎌を振るうのは、彼女。

正直に言えば彼女にとってこの武器、断刀<たち>と言う一文字変えただけの大太刀は予想以上であった。

確かに日本の刀は折れず、曲がらず、よく切れると言って世界でも有名な刃物である事は知っている。

だがこれはそれを極限まで追求した物である事が理解できる。

まずは『折れぬ』、岩に叩きつけようと、力自慢の大男が大振りの金槌を思い切り振り下ろしても、弾き飛ばす様に当たった方が壊れる。

次に『曲がらず』、生半可な力では僅かにも曲がらず強靱、曲がったとしてもそれはしなるだけですぐに元通りに戻る。

そして『よく切れる』、刃を上向きにしておき、上から木の葉っぱを置けば葉っぱの自重で両断される。

間違はなく『可笑しい』、三つの相反する性質をそれぞれ極限まで引き上げた代物。

『黒刃金』の店主が言うだけの事はある、それにちょこつと重いし。

そんな事を思いながら彼女は断刀を振るい続ける。

残念な事に断刀は長く重い、その為振り抜くためには足を大股に広げなくてはならない。

そうになるとローブが広がって胸から下が見えてしまう。

姿を晒すのは好まない彼女にとって、それだけが唯一の難点であった。

「一杯居るわね」

そう呟きながら、烈風が周囲を蹂躪する。

既にグラシアントを切り伏せた数は三桁に届く、たかが30センチほどの大蟻が彼女に手傷を負わせる事などありえない。

今この時点での草原の覇者は彼女以外にありえない、だからこそか、まるで無限に湧き出るかのように蟻は襲い掛かってくるのを止めない。

彼女からすれば探す手間が省けて願ったり適ったり、嬉々として……ではないが手間が省けてお金も稼げると一石二鳥。

ストーンストーンと草を切り裂き、グラシアントを切り裂き、地面に裂傷を作り草原を練り歩く。

お陰で彼女が通った草原は中々に酷い有様。

自然破壊になるが、それに気にする時でもない。

何せ遠くから声を上げて走ってくる人影があったから。

断刀を振りながらもその走ってくる人影、人物をその双眼で見る。

『見よう』と思えばまるで双眼鏡のように拡大される視界。

そうして見た人物は女性、自分の年齢とそう変わりそうではない

少女。

短い杖を右手に持ち、少し大きめの水色のローブを着た金髪の少女。

涙を流しながら、大声で叫びながら、なりふり構わないその姿は。

「たすけてえっ！」

救援を求める姿だった。

声を聞くと同時に身を翻し、少女が居る方向へと一直線。走りながら断刀を振り回し、進路上に居る蟻をなぎ払う。

「たす、たすけてえッ！！」

足が縛れ草むらに倒れる少女。

グラーアントはそれをチャンスと見るか、高速で群がり、倒れた少女を食いちぎらんと顎を鳴らす。

が、それよりも早く両断される。

倒れた少女を拾い上げるかのように、その胸に腕を回して抱え起こす。

「たすけてえ、ケイちゃんが、ケイちゃんがあ！」

走っていた為に荒い息、咽ながらも名を叫ぶ。

「走るから手を回して」

抱く少女が走ってきた方向に、一人だけ剣を振り回している人が居る。

あの人が少女が呼ぶ人だろう、たった一人で戦っている。少女を逃がすために囷になったのか、見ていれば腕を背中に回さ

れる。

そうして『飛ぶ』、容易く草の丈を超え、人が出し得ない速度で掛ける。

左手に同じ歳位だろう少女と、右手に長大な太刀を持って加速。

「ヒッ！」

急加速により掛かる慣性、全身を押されるような感覚に悲鳴を漏らす少女。

構わず彼女は等間隔で跳ね駆け、十秒も経たず目的地まで届く。そうして右腕を振るう、抵抗無く軌跡上にある物体を切り裂き、地に足をつけた。

「ッ……あんた」

剣を杖代わりに立つ少年、その左足の踵骨髄、アキレス腱が無残に食いちぎられ、骨まで見えている。

白い骨に、赤い血で彩られた怪我。

これは歩く事すら出来ない、放っておけば出血多量で死んでもおかしくない。

「助かつ」

少年が言い切る前にボンッと草むらが弾け、そこに潜んでいたグラリアントは弾け飛ぶ。

腕が霞むほどの速度で振るわれ、草むらと蟻と、地面が抉れる。草刈り機も真っ青な、周囲の地面が混ぜ繰り返されるように切り裂かれて拓けた。

少年と少女の顔も真っ青、自身が苦戦した蟻が事なげ無く蹂躪され、殺される。

「……助かった」

左足の激痛に耐え、抱きついている幼馴染に回している腕に力を込める。

森に入らなくて正解、この人に頼って正解だったと思い直す。

「早く飲んで！」

「……ああ」

押し付けられるポジション、赤い液体の即効性治療薬。

そのビンのコルクを空け、一気に呷れば全身に染み渡り、体中に付いていた傷が塞がり始める。

アキレス腱も同様に、しかし効果が足りないのか塞がるのが止まってしまう。

それを確認してもう一本あけて呷る、そうしてやっと傷が塞がった。

凄い……、それが『ヒーリングポジション』の効果を見て思ったこと。

普通ならば外科手術を施しても歩けるかどうか分からない怪我、それが映像を巻き戻すかのように塞がり治る。

ファンタジーならばお約束だろうポジションだけど、実際に目にしてみると凄まじいを通り越して有り得ないほどの効果。

これ程の効果ならば、即死でなければ死なない可能性が大きい。素早く飲めると言う条件が付く物の、擬似的な不死にでもなれるのではないかと思うほど。

そう思うのは、これでヒーリングポジションの中で一番効果が低いと言うこと。

さらに上位四種類のポジションがある、そんな物を服用すれば胴や四肢が大きく抉れていても瞬間的に治癒するかもしれない。

地球の科学では無し得ないし、医療技術などが全く発達しないのが容易く納得できる物だった。

「………」

一通り断刀を振り終え、切っ先を地面に落ち着ける。

周囲は草が全てなぎ払われ、足元がしっかりと見える。

距離の関係で背丈が不揃いだが、グラリアントが草むらに紛れて近づくのは十分に阻止できる。

と言ってもこれだけで50匹以上切り殺したのだから、それなりには数が減っているだろう。

「……270枚」

「え？」

少年と少女、治療をする必要がなくなった事に安堵し、これまで倒した蟻の討伐部位の確保が出来た数を呟く。

もう少し倒して稼いで置くべきね。

思い立ったが吉日、前に出した足で大きく踏み込み、剛腕を振るう。

変わらず草と一緒に蟻が斬り飛ばされる。
満足はしない、まだ足りないとい飢える獣。

それを感じ取ったのか、蟻は寄ってくるのを止め、草むらの奥、森の奥へと消えていく。

だが追撃は止まらない、グラーアントを圧倒的に上回る速度で寄り切り、逃げる蟻を叩き割る。

「逃げるのは駄目」

切って切って、追って斬る。

モンスターなど目の前にぶら下がるお金にしか見えない。

手を伸ばせば十分に届く、だから殺す。

殺せば殺した分だけ早くなる、待たせたくない、これ以上あんな事をさせる心算など無い。

だから。

クロス。

初心者、EやDランク冒険者はかなり少ない。

その理由の一つはランクアップ、もう一つは冒険者の脱落。

これが二番目と三番目の理由。

少なくなる最大の要因が、『冒険者の死亡』。

討伐しに行ったモンスターに殺される、冒険者が脱落する一番の理由がこの原因。

幾らランクが上がろうとも、上には上に強いモンスターが居る。亜人を含む人間たちが相手に出来るモンスターランクは『S』までだと言われている。

SSにまであがるとAAAランクの実力を持つ人間が1000人居ても、簡単に蹂躪される力の差が出来上がる。

一匹で一国を滅ぼせるだけの実力を持つモンスターが闊歩する世界、弱肉強食が物理的な意味で実在する、弱い者が死んで当然の世界でもある。

それを討伐するとなると、どうしても身近に『死』が纏わり付いてしまう。

それに怯え、冒険者を辞めるものだって居るし、怯む事無く立ち向かいランクアップを果たす者も居る。

だが世界は甘くない、人間が死ぬ要因の実に8割がモンスターによる襲撃で命を落としていると言うもの。

寿命で往生できる者など国の中心、王都など安全な場所に住む者たちばかり。

辺境に住む者が老衰で死ぬ事などまず有り得ない。

そうした世界の中でこの二人、ケインとユリスは間違いなく『運が良い』のだろう。

『偶然』『運良く』彼女が同じクエストを受けたから助かった。

もう数分彼女が黒刃金の店主と会話をしていたら、もう数分早く店を出ていたら間違いなく二人とも『死んでいた』。

「……良かったなあ？ 奴さんが居て」

「……はい」

ギルド内の一席、ギルドの教官グレニーと、Dランク冒険者のケインとユリスが向かい合って椅子に座っていた。

「まあ無事に戻ってこれたんだし良いけどよ、『次』は無いからしつかり気をつけろよ？」

「……はい」

あの後、彼女が蟻を追い回し、全滅させるかと言うほどの蹂躞劇を見た二人は多少怯えながら討伐部位の切り取りを進んで手伝った。命を救ってもらったんだからこれくらい当然、寧ろ進んでやら無いと気が済まない。

剥ぎ取り用のナイフでチマチマと、グラーアントの討伐部位である触覚を切り取り彼女に渡す。

そうすれば。

『ありがとうございます』

とフードの中から綺麗な声が返ってきて二人はより驚く。

ユリスは先の助けを求めたときに声を聞いていたが、気が動転しててしつかりと覚えていなかった。

グラーアントなど歯牙にも掛けない力を見せ付けた冒険者が、実は女性だったなんて思いも寄らなかった二人。

さらには彼女がいまだCランクと言う低い位置に居るのがより信じられなかった。

「登録したのが二日前だったの、今回の虫退治でBに上がるけど」

「……凄いですね」

「ギルドランクを当てにすんなよ、実力はA Aはあるだろうし。」

そう言う奴が居ても全く不思議じゃないからな」

通りで、と思う二人。

あんな凄まじい実力でCランクなど、AとかA Aランクはどれほ

どの物か予想も付かない。

「それでもあいつは別格だろうしな、多分何事も無けりゃAAAまで登るだろうよ」

「……凄いです、どうやったらあんな風になれるんでしょうか」

「お前さんじゃ無理、ケインも無理だな。ありやあモノが違いくぎる、天性のもんだろうよ」

「そうですか……」

「あいつはあいつ、お前さんはお前さん。目標とするのは良いが、同じになろうとするのは止めときな」

どれほど鍛錬を積みばあんな風になれるのか。

「死なないように頑張れ、あいつのようにには成れんだろうがそれなりの冒険者には成れるだろうしよ」

「……はい！」

「報酬貰ったんだろ、装備揃えて次に備えとけよ」

グレニー教官が立ち上がり、奥の席で話している受付のベリルさんと、あの人が居る所まで歩いていった。

「……凄いね」

「ああ」

「……私ね、ケイちゃんが冒険者に成るって言うから付いてきたんだよ」

「……ゴメン」

「蟻に追いかけてももういやだって思ったんだ」

「……」

「でもね、あの人に助けられた時とても嬉しかったの。私ね、あの人みたいに誰かを助けられるようになっていたいと思ったの」

「……ああ」

ユリスがこっち向いて笑った。

「ね、強くなる？」

「ああ！」

「で、100匹どころか370匹？ 毎回面白い話を持ってきてくれるな」

「すみません」

「すごいわねえ……、保存袋が一杯よ」

大きく膨れ、楕円形にまでなっていた袋。

その中は全てグラーアントの触覚。

「10匹討伐でプラス金貨10枚か、それで合計450枚……やりすぎだな」

本来ならば複数の冒険者が複数回に渡って討伐を行う依頼。

それを一人で、数十人分の数を討伐した物だからこの依頼は取り下げられた。

先のオークも同様、こうなると他のDやCランク冒険者から反感を買ったりするだろう。

「小物狙いじゃなく、大物にしたらどうだ？ お前さんならAラン

クは楽勝だろうし、A Aでも十分いけると思うがな」

「反対よ、反対！ 危なすぎるわ！」

「お前に聞いてねーよ、それにしてもこのごろ小物がやけに多いよな」

「……確かにねえ、さっきもクレントフォックスの大量討伐の依頼が来てたわよ」

「……全く、やっぱり魔王関連か？」

「世界を滅ぼすって奴？ 本当にそんな奴が居るのかしら」

魔王が小物のモンスターを増やして人間の甚振っている。

そんな噂が数年前から漂っていた、さらにはその魔王を討伐するために専用の軍が発足されたなんてのも聞いた。

果てはどこかの国が『勇者』を輩出とかなんとか。

正直どうでも良い、早くあの子達を解放するためのお金を貯めなくては。

「あら、どこ行くの？」

「依頼を見てきます」

「さっき終わったばかりじゃない！」

「時間ありませんので」

そう言って止めるベリルさんの言葉に返し、依頼掲示板へと足を向ける。

奥の席から掲示板までの間、いくつ物テーブルが並び、そこに座っているほかの冒険者たちが幾人もこちらを見る。

やっぱり依頼潰しが気に食わないだろうか。

「……………」

そのまま通り過ぎ、掲示板前まで着く。

ここは大物、一匹で大量のお金を稼げるモンスターじゃないと駄目だろう。

……コボルトオルグ<牙猪>、マンマタンゴ<歩く毒茸>、トライアード<腐敗した木人>、比較的弱い金貨500枚を超えるAAランクのモンスターばかりだが、如何せん出沒地域が遠すぎる。

これは駄目、これも駄目、そうして出来るだけあの地域に近く、高い報酬金が出るモンスターを選ぶ。

そうして選り好みした依頼を手取る。

『銀色の妖狐の討伐…討伐報酬、白銀貨9枚』

白銀貨、1枚で金貨100枚に相当する上位貨幣。

それが9枚と言うことは金貨900枚相当、出沒地域もあそこから1日も掛からない。

「……これで」

開放させることが出来る。

そう思えばすぐにでも動かなければいけない。

手に持った依頼を受付へと持っていく。

それを見ていたベリルさんが慌てて受付カウンターへと戻る。

「……これを受けます」

「AAランク、本当に受けるの？」

「はい」

「銀常狐<ぎんじょうきつね>？　また希少なモンスターを選んだなあ」

銀色の光を常に放つ狐、ゆえに銀常狐と呼ばれるモンスター。特に夜の銀常狐は神秘的な風格さえ宿し、その毛皮は高値で取引

される。

希少と言うのは乱獲されたなどと言う理由ではなく、元より数が少ないために希少と言われる。

「流石にこいつと戦ったことないな、噂じゃ尋常じゃない速度で駆け回るらしいぜ」

素早いと言う意味か、多少早い程度では簡単に捉えられるから逆に良い獲物になる。

「大丈夫です」

問題は無い、殺し切って稼ぐだけ。

「え？ もう行くの？」

「はい」

水晶球に手を置き受注、そうしてギルドから出て行く。

「急いでるな、お嬢ちゃん。余程金が入用らしいな」

「……何かあるんでしょうね」

「無けりゃ冒険者やってなかっただろうよ」

「それはそうだけど……」

「気にしすぎだ、中立で居ろとは言わんが深入りしすぎるなよ」

「分かってるわよ」

「そうだと良いがな」

「一々うるさいわね！」

「……危ない感じがする、だから言ってやってんのによ」

「うっ……、あんたがそう言うならそうかもしれないけど」

グレニーの悪い予感、それは大体が当たる。

子供の頃からそうであり、大人となった今でもそれは変わらない。良い予感の一つ足りとも当たらないけど、悪い方向のは無視できないほどの中率を誇る。

「美人だろうが何だろうが、人を寄せ付けようとしないう姿勢は何かあるのさ。一重にかかわる奴等の心配でもしてるんじゃないのか」

嫌な予感は的中する、だからこそ余計に心配していしまう。

グレニーの言葉、見事その悪い予感は当たっていた。

追加とされ届いた賞金首リストに、彼女の姿が載っていたのだった。

五話 兆候＜シンプトム＞（後書き）

お盆って普通休みじゃないの？ 16時間労働とか風呂入って飯食って寝るしかできねー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6077h/>

Arms of life

2011年2月16日12時55分発行